

白 濠 主 義

— 成立とその歴史的展開 —

河 地 貫 一

異の念を抱かざるを得ないであらう。かゝる不調和な景観は如何にして由來したものであらうか。

わが南方軍政地のすぐ眞南に位置する濠洲は、總面積七七〇萬平方料に及び、我が國の面積の約十二倍に相當し、北米合衆國のそれに略々等しい。然るにこの廣大なる土地を占居するものは周知の如く殆んど全部がアングロ・サクソンであつて、その總人口最近やうやく七〇〇萬を超へたにすぎず、これはわが東京都の人口にも及ばない。密度から云へば一方料〇・九人、我が國の一方料一四四・七人に比すべくもない。而も、かゝる殆んど無人地帯にも比すべき人口稀薄の地が、人口の稠密なるモンスーン・アジアに直ちに隣接して存することに人は驚

異の念を抱かざるを得ないであらう。かゝる不調和な景観は如何にして由來したものであらうか。

濠洲はもとよりアジアと深き關聯を有する。その民族的要素に於て、その自然と風土の性格に於て、それはむしろアジアの一部をなすといふも過言ではない。小牧博士によつてこの地が南アジアと呼ばれ^②（白人も亦不用意にこれをオウストラル^① || アジアと稱へ）たことはまことにその本質を洞察せるものと言ふべきであらう。而も濠洲のもつこの地理的必然性こそは、この地を領有する英國に取つて不斷の障害であつた。従つて彼等の政策は常に濠洲に於けるアジア的性格の排除、英本國への隸屬化の強要となつて現はれたのである。その中心をなすも

の、それが今こゝに問題として取上げやうとする白濠主義に外ならない。

従つてこの様な方向は、濠洲の英國領有當初より看取されるのである。先づ地質時代アジアより渡來したと思惟される原住民の排除からその植民の歴史が展開する。

一七八八年アーサー・フイリツプの指揮する七〇〇餘人の囚人と、これが秩序維持の任に當る兵士達とをのせた「最初の艦隊」はボタニー灣に上陸した。英國は合衆國の獨立によつて失つた流刑植民地をこの西南太平洋の大陸に求めたのである。而しそれによつて齎らされたのは、これら兇惡なる流囚によつて行はれた原住民の壓迫であつた。彼等は既にアメリカの原住民に對して行つた如く、こゝでは更に一層慘虐な手段によつて原住民の樂土を掠め、更にはその民族そのものの生命をすら奪つていつたのである。所謂土人狩は屢々彼等のスポーツであつた。

その結果は英人植民當初百餘萬を數へた原住民は現在五萬餘に減じ、その郷土を逐はれてわずか北部熱帯に餘喘を保つに過ぎない現状にある。特にタスマニアにあつて

は、それが彼等囚人の最も兇惡なもの、隔離所となり、且つ大陸の植民地が、その發展に伴つて流刑地たることを廢止された後も、最後までなほ流刑植民地として殘された爲に、植民の當初二萬餘を數へたこの地の原住民は、その後約百年にして遂に永久に地上からその姿を消し去つたのであつた。

かうして濠洲は、いはゞその原住民の鬻賣の上に築かれた英國の植民地であつた。彼等の行つた殘虐非道の跡は、如何なる強辯を以てしても遂に蔽ひ難いところであらう。現在ではもはや全く無力と化した殘存原住民に對する保護が行はれてゐるとはいへ、それは一種の骨董品を保護する心理と何等擇ぶところはなく、而もその勞力を使用する場合等においては、依然として動物を遇するより冷酷なること、既に濠洲人自身の認めるところなのである。

未開地に於けるこの様な原住民の清掃によつて、英國の濠洲開發は初められた。それは既に濠洲内部に藏するアジア的萌芽の芟除を意味し、云はゞ白濠主義の發芽は

かゝる血の悲劇の中に見られるのであつた。

二

十八世紀末の英國に於て、既に棉花が有力な纖維原料となりつゝあつたとは言へ、毛織物の輸出は依然としてその全輸出額の三分の二を占めてをり、その業者は政府を動かす力を持つてゐた。この事は新たに開かれた植民地濠洲の性格を決定する役割を擔つたのである。殊に羊毛紡績機 The Wool-combine Machine の發明、^④産業革命による羊毛原料の大量の需要によつて、その取獲地をこの西南太平洋の未開の大陸に求めたのであつた。ナポレオンの歐洲制覇によつて従來大陸から輸入されてゐた羊毛の杜絶は、一層かゝる要求に拍車をかけたのである。濠洲は英本國の牧場である。^⑤ことは既に植民當初からの英本國の要請であり、換言すれば、英本國の毛織物工業こそ濠洲開發の規定者であつた。

英領植民地としての濠洲は、この様な基礎の上に出發したもので、従つてそれは何よりも單一生産の傾向を取

り、他の諸産業は殆んど顧みられなかつた。一八〇三年既に濠羊の英本國への輸出が見られたにも拘らず、僅かな彼等移住民を養ふ食料品さへ自給されてゐないのである。彼等の生命の糧となつたものはるか海洋をへだてた南阿及び南米の小麥であつた。^⑥濠毛の中心的な位置を占め、その毛質の良好を以て著名なメリノ種は、實にこの食料を求めて南阿に入港した船の移入したものである。われ／＼がこゝに注意すべきことは、濠洲が些少な食料品に於てすら近接するアジアへの依存を許されなかつた事實である。

然し乍ら、このやうな畸型的な生産がいつまでも許されるはずはない。ゴールド・ラッシュによる急激な人口増加と相俟つて、その農業の發展は、やがて必然的な要請となつていつた。小麥を始め、現在濠洲に見られる農産物の主要なものは殆んど、この時期に始めて發芽を見るのである。^⑦しかし羊毛の急激に増加する輸出に比して、此等は殆んど擧げるに足らない状態であつた。現在の輸出の大宗たる小麥の如き、漸く一八九七年始めてその輸

出を見るに至つたのである。而もこれは、一八八四年後の歐洲に於ける羊毛價格の深刻な下落によつて「もはや一業にのみ投資出來なくなつた」^⑧ 藻洲經濟の苦惱の表現に過ぎなかつた。酪農業も亦、當時發明された冷凍法によつて、英本國の要求に應じて生れたものであつて、やはり右の範圍を出るものではなかつたのである。

何れにしても、かゝる農業の出現を以て、そのまゝ舊大陸ことにモンスーン・アジアに於ける如き土着的農業と同一視することは許されない。即ち藻洲にあつては農民の殆んど全部が都市に居住して粗笨な耕作を營ひ換金の農業經營者であり、土地から遊離した農民として英國植民地的形態を取る事が要求されたのである。この様に藻洲に於ける農業の發展は、英國の經濟開發政策によつて一定の限界を持たねばならなかつた。白藻主義は先づかゝる藻洲の經濟開發のうちに胚胎する。従つて吾々はこの立場に於て、特に熱帶藻洲の開發の問題を通じて、白藻主義の成立を考察して行きたい。

熱帶藻洲の開發は主としてクインズランドの棉花・甘蔗の栽培を以て代表され得る。たとへ、それが奴隷廢止による西印度糖業の凋落、アメリカの南北戰爭によるイギリスへの棉花の輸出の杜絶等の世界的情勢を契機として起り、その僅少な生産と、花火練香的な隆替のうちに終つたものであるにしても、吾々はかゝる農業の發芽をこゝに見たことを見逃してはならないのである。殊に棉花は英國産業革命の基調をなし、既に毛織物に代つた綿織物の原料纖維として、英本國工業存立の爲の絶対不可缺のものであつた。一八五一年マンチエスター商業會議所の調査の結果發見されたクインズランドからニュー・サウス・ウエールズ州にかけた廣大な黒土地帯は英本國業者の見逃す所ではなかつた。^⑨しかしその開發の爲には、安價な大量の勞力の確保が絶対に必要である。この要請に答へて、通常カナカ族と呼ばれてゐる太平洋島嶼人、印度人、支那人等々が續々移住して、これが開發に多大の貢獻をなしたのであつた。かゝる事實はアジア人の貢獻なしに藻洲の經濟的開發は不可能である事を示すも

のとして、まことに注目すべき事であらねばならない。この意味で濠洲經濟の發展は必然的にこの土地の本來有するアジア的連繫を深めて行く。その故にこそ、濠洲に於てはこれらの諸生産は、その若芽のまゝかり取るべき運命を擔つてゐた。

成る程當時既に合衆國の南北戰爭は終了して、英國の棉花輸入は常態に復歸してゐた。また、西印度の糖業も復活し、更に歐洲に於ける甜菜糖も亦漸く活潑であつた。

而も英國はその後に於ても、尙ナイルの河谷に實つた「白色の黄金」の故に「エジプト及びスダンの軍事的征服を敢てし」て、棉花の對米依存の脱却に努力し、印度人の半ば奴隸的移住のもとにナタール地方に於て、甘蔗の栽培に狂奔してゐたのである。これらの事實を併せ考へる時、熱帶濠洲の經濟的役割が最早終了したことを意味するものではないはづであつた。而も合衆國の獨立に苦い經驗を嘗めてゐる英國は濠洲への勞力の移入を峻拒する事によつて、その開發の放棄を強要したのである。

即ち英本國の經濟的利害に直接の影響を持たない甘蔗

の栽培は、カナカ人の勞力を、熱帶の勞働能力の極めて低い白人勞働力に置き換える事によつて、その若干の栽培を許可した。しかし濠洲綿製品の自給的要求を生ずる原因となり、英國綿工業に對する脅威を意味すると思惟される棉花の栽培に至つては、全く忘れ去られて了つた。⑩かゝる事實は、濠洲の土地が本來有するアジア的性格へのアングロ・サクソンの反撥と、本國の經濟的利害との結合によつて生み出された奇妙なる鬼子であつたのである。

この様に白濠主義の成立にあつては、その當初より英本國の強力な政治的背景の存在は當然豫想される所であつた。

かうして白濠主義は先づアジア人特に一八六〇年既に四萬を超へた支那人の排斥をその出發點とした。金鑛發見と共に流入した支那人に對する英人鑛山勞働者の流血をよんだ排斥問題⑪は、實に英本國に取つては、これを具體化すべき天與の機會であつた。一方英國はマライ・南阿等に於て、その勞力の必要上、北京條約を締結して支

那人勞働力の自由なる移入を要求しながら、この濠洲に於て、あらゆる手段を弄してその移住を防止したのである。もとより、排斥さるべき何等の合理的な理由のなかつた支那人に對するかゝる迫害は、その初期に於ては、單なる英人の利己主義からする感情的な嫉妬と、不當な人種的優越感から發したものであつた。しかしやがてこれらの迫害も、組織的な政治的排斥運動に進行して行つたのは當然の事なのである。

勿論英本國はかゝる濠洲の支那人移民排斥が、本國の對支外交上の精神に反するものであるとして、ニウ・サウス・ウェールズ州に對して警告を發してゐる。然し乍ら、それは單なる表面的な對支ゼスチュアに過ぎなかつた事はいふ迄もない。而もこの様な支那人排斥は全アジア人排斥に發展さるべき前提であつた。即ち、單に支那人移民の排斥は、對支外交上支障を來たすを理由として、全アジア人移民の排斥が最も合理的であるとすする指令が行はれたのである。これこそ英本國の眞意でなくて何であらう。

然し乍ら、濠洲の土地自身は、その開發を志向すればする程、アジアとの連繫を要請する。ことに濠洲の政治形態は、本國の分離統治の政策上、各州は自治權を附與されてゐたので、熱帯開發に努力するクインズランドや、北部濠洲を當時監視してゐた西濠洲は、かゝるアジア移民の拒否に猛烈なる反對を唱へた。事實支那人排斥問題から白濠政策が漸く喧しくなつてゐた時、クインズランドの開發にアジア人勞働者は續々入國してゐた。またこれとに注意さるべきは、西濠洲の對日交渉であつた。北部濠洲を監視してゐた西濠洲政府は、一八七六年に、日本移民を英國移民と同等となすを條件として、その移住を求めてゐるのである。而もそれは英本國を通さずして直接の對日外交交渉であつた。これはその植民開始以來初めての事件であり、濠洲外交史上特筆さるべき事實であつた。この事は深い示唆を吾々に與へずには置かないであらう。

更にまた、クインズランドに於ける、かゝる移民排斥反對の運動は、遂に政治的運動に迄發展した。北部クイ

ンランド分離同盟 The Queens land Northern Separation League. の運動は、聯邦成立直前迄執拗に行はれてゐるのである。今大膽な推論が許されるならば、もし北部が合衆國の南部の如く有力であつた時には、當時、濠洲の南北戦争の可能性が考へられた。またグラツドストンが合衆國についておそれた様な南北分離の情勢が、或はこゝ、濠洲に於ても、實現せんと考へられるのであつた。

この様な一聯の事實は、濠洲の土地のもつ地理的必然が北部濠洲を通じて、英國化せんとする南部、否全濠洲に對抗したアジア復歸の運動であつたのである。更に言ふならば、それはもはや單なる人口の稠密な地域と、空虛な空間との人的資源の交流を意味するのみではなく、廣くアジアと言ふ地域的地盤の上に立つ土地と土地との必然的な地理的一體化の運動と見る事が出来よう。

かくて白濠政策は、實に濠洲のアジア的性格の芟除の故に取られたアングロ・サクソンの本能的所産である事を深く思はねばならないのである。

而して濠洲北部と雖も、その支配者はアングロ・サクソンである。彼等の屬するところは結局英國的秩序であり、彼等の奉ずるところも亦英國的思想であつた。こゝに土地自體の要求を無視して、白濠主義が勝利を得べき基礎がある。果してさきに支那人問題を契機として取上げられた白濠政策は、更に濠洲在住民の思想に迎合する手段が取られた。濠洲移民は本國に於ける急激な産業革命による深刻な社會問題を知つてゐた。そして彼等は何等歴史的な事情に拘束されない新しい土地に於て、所謂理想的な社會主義的國家の建設を夢みてゐた。かくして殆んど無償に等しい勞力を提供する囚徒の移住に反對して、流刑植民地を廢止せしめ、また安價な勞力をもたらし有色人の移住も、かゝる彼等の獨善的な理想の實現を絶望的ならしむるものとして排斥した。そして英國はかゝる濠洲人の利己的な思想を巧みに政治的考慮に迄齎らしたのである。

かくして南阿、合衆國等の有色人問題が誇大に濠洲に宣傳され、黃禍論はこゝに一層毒々しく開花した。更に

クインスランドの甘蔗畑の所謂カナカ人に對しては、その移入が、何等奴隸のそれと選ぶ所がないといふ、彼等の常套手段たる假面的人道主義が鼓吹された。その結果、カナカ人は一層慘虐にもその故郷に送還されてしまつたのである。

更に一層效果的な手段は、濠洲人の國防的不安に乗じた事であつた。濠洲北邊諸島へのフランス、ドイツの進出、はては日本の脅威の宣傳等は、對立してゐた各洲を共通の不安に戰かしめるに充分であつた。

かうして各自治洲の對立的意見は放棄せられ、アングロ・サクソンの共感に基く白濠主義なる一つの旗幟のもとに、こゝに各洲を打つて一丸とする濠洲聯邦は二十世紀の初頭をかざる歴史的事件として誕生した。それは言はゞ、濠洲のアジア的性格に對する英國植民地的要請の凱歌であつたと言ひ得るであらう。

三

かく英國は白濠主義を濠洲に採用せしめ、その開發を

阻止して、アジアの性格を否定せんとするその意圖は一應成功を收めた。然らば、白濠主義は具體的には英國に取つて如何なる意義をもつものであらうか。それはまた如何なる歴史的發展を示してゐるのであらうか。

白濠主義のまづ結果したものは人的資源の不足から來る經濟的、國防的英本國依存態勢の徹底化であらう。言ひ換へるなら、濠洲を永久に英本國の植民地として存在せしむるものであつた。

英本國にとつて肥沃な牧場であり、小麦、酪農品等の食料供給の地域として成立せしめられた濠洲の經濟は、これら原料品・食料品の輸出を支柱として運轉されねばならなかつた。而もその農民は所謂アジア的な自給自足の農民ではなく、人口の七〇%を都市に集中せしめ、高い生活程度のもとに都市生活を享樂する農業經營者なのである。即ち彼等には自己の力を以て生活することが許されてゐない。

この様な性格をもつ地域は、世界的不況、就中彼等の

宗主と仰ぐ英本國の貿易の衰退によつて徹底的打撃を受けねばならない。このことは農牧の單一生産國から産業の多角的發展、就中工業の發展を必然的に要請するに至るであらう。而も白濠政策による勞力の不足の爲に、その勞働力は實に貴重品である。従つてそれはまた極めて高價なものとなつてゐる。加ふるに極めて高い生活程度の維持が法令によつて保證せられてをり、——彼等のいふ理想的社會の一具現であらう——従つてその工業製品の生産コストは恐るべき高價なものであるのは當然である。かくてこの國の工業製品は海外市場への進出が不可能なばかりでなく、自國內市場に於てさへ、關稅の障壁を超へて來る高價な英國製品にすら對抗する事が出來ないのである。即ち白濠主義はかゝる濠洲工業發展の要請を絶望ならしむる決定的障害であつた。

而も勞働力の過少の結果として當然將來せられた高き生活程度——それが有色人移民によつて脅かされるであらうといふのが白濠政策宣傳の一つの思想的根據でもあつた——はその稀薄な人口を以てして尙、英國製品の大

消費地として存在せしめ得ることによつて、濠洲に對する一石二鳥の効果となつてゐる。

第一次大戰後、その國防的要求からも急激に濠洲工業の發展を見たとは言へ、尙その輸入品の大部分は機械類、衣類によつて占められてゐる。かくては高關稅政策と、政府の保護制度によつて、その消費者の犠牲に於て、國內市場の自給自足と言ふ目標が、濠洲工業の維持、發展の爲の唯一の途とならなければならぬ。例へばクインスランドの糖業は、甘蔗の生産に制限を加へ、安價な外國製品の輸入を禁止、自國砂糖の輸出に保障金を與へて、消費者の犠牲によつて辛うじてその生産が維持されてゐるが如きは、その好例であらう。⁽¹⁶⁾

然し乍ら、この様なことは、當然英本國からの輸入品にも高關稅が附與されることを意味するものであつた。

こゝに既に英國の濠洲を本國依存に強制せんとする政策の破綻が窺はれる。而も、更に一步進んで、國內綿製品の自給を目標として、さきに忘れられてゐた棉花の栽培と、綿業の保護が、クインスランド政府によつて行はれ

た。これは勿論本國のランカウツシャ一の猛烈な反對に、深刻な經濟鬭争を惹起したものであつた。自然の要求は遂に抑壓すべくもないのである。この様な濠洲の多方面の自給的傾向は、世界の好況によつて、原料品等の輸出の活潑となり、従つて國內に於ける高價なる製品の消費能力の増大する時には、一層本國に對する經濟的分離傾向を増すものであつた。對英外債放棄論の擡頭も實にこの時期の所産である。

然し、この様な本國分離の傾向も「白藻主義が最早議論を超越した問題」として固持される限り、濠洲のアジアへの復歸を示すものではなく、國內自給を目ざす偏狹な閉鎖的孤立社會へと移行して行く姿に外ならないのである。然し乍ら、アングロ・サクソンの爲の濠洲を標榜する白藻主義は、既にこの様に濠洲人の爲の濠洲と、その相貌を變へつゝある事を吾々は見逃してはならないであらう。しかもこの様な工業發展の政策は、この國が原料輸出によつて、その經濟を維持してゐる以上、必然的にその原料輸出の市場を縮小して農牧業者に甚大な打撃を與へ、

ひいては自國工業製品の國內消費の不活潑となるであらう。即ち濠洲に於ける工業保護政策が却つて、工業の發展をそれ自體の否定的性格を持つのである。かゝる事は世界の不況時に一層深刻であつた。濠洲の工業はいはゞ高關稅と保護政策と云ふ不安定は砂上に築かれた樓閣に過ぎないのである。濠洲が一九三〇—三一年に外債支拂の不可能が直接原因となり破産に頻した事は周知の事實である。

オツタワ協定の参加が濠洲に強要せられたのも、實にかゝる基礎の上に於てゝあつた。この協定に對して濠洲はその輸出の太宗たる羊毛・小麥等について、何等得る所なく、而もそれが自國工業の發展を阻止するに役立つのみであると認めざるを得なかつた¹⁰⁾にも拘らず、その好むと否とによらず、これに参加しなければならなかつたのである。而してこの事が濠洲に取つて最も將來性ある東亞の市場の喪失を意味したことは改めて説く迄もないであらう。かくしてやはり濠洲は英本國への隸屬とアジアからの乖離を餘儀なくせられるのである。

白濠主義はかやうにして濠洲の經濟問題の基底に横はつてこの大陸を本國依存に方向づけて來てゐるが、更にこれを支持し、強化するものがその國防問題であつた。

既に白濠政策が唱へられた時、英本國が日本の脅威を誇大に宣傳し、またドイツ、フランスの太平洋進出による濠洲人の國防的不安の念を助長した事を思ふならばこのことは容易に了解出来るであらう。濠洲人自身も亦、自己の利益の爲にこの政策を採用した以上、人口の稠密なアジア、ことに熱帯開發の能力を有するアジア人を恐れねばならなかつた。そしてこの脅威が當然アジアの指導的強國たる日本への恐怖となる。かゝる感情から自己を守る事は、その稀薄なる人口を以てしては到底不可能であり、かくして軍事的にも英本國への依存とならざるを得なかつた。この意味で實に白濠主義とは、英本國の海軍への限りなき信頼の上に咲いた惡の華であつたと言ひ得よう。しかもその海軍とは英帝國を成立せしめる最も具體的な地政學的紐帶であつた。こゝに濠洲の英帝國的連帶感も生れる。かくして白濠主義はまたニュージール

ランドの自己防衛の不安と結合して、不遜にも「アングロ・サクソンの爲の太平洋洲」なる政策へと發展して行つた。C式委任統治とはかゝる濠洲の要求のもとに生れたものである。^①第一次大戰に於て、濠洲が日本海軍の活動を赤道以北に限つた事情もかくして了解し得るであらう。

これは立場を換へて英本國からいへば、濠洲は自ら英本國の西南太平洋の前哨たるべき地位を宣言したものに外ならない。即ち消極的なアジア的要素の排除から積極的なアジアへの攻勢の據點へ、これが全英帝國的規模の内に濠洲が甘受した軍事的地位であつた。かくして自治領濠洲がニュージールランドと共に、他自治領に比して本國に極めて忠誠な所以も了解される所である。

然し乍ら、この様な英本國への依存關係の強要にも拘らず、濠洲自體の特に第一次大戰後の發展と、それへの濠洲人の誇負とが、英本國の衰頹、ドイツの凋落、日本のワシントン會議に於ける彼等の殆んど「信すべからざる屈服」等の國防的不安の減退等諸般の世界情勢の變轉のうちに、本國からの分離的傾向を示して來た。既述せ

る濠洲の經濟的事情は勿論かゝる傾向を一層強める因子であつた。これらの事は政治的にウエストミンスター法の制定となり、或は英人ならざる濠洲人の總督の推戴となり、更には英濠移民協定の廢棄となつて現はれてゐるのである。

ことに移民協定は、人口の稀薄の故に、國防的にも本國依存を強ひた白濠政策の明白な破綻を示すものであつた。即ち第一次大戰の結果濠洲國防上の不安が遺憾なく暴露されたのを契機として、英濠間に移民に關する協定が結ばれたのであるが、危機感の減退と、一般政治經濟情勢の急激な變化を背景として、先づ濠洲労働者の勞力移入の反對の叫びが結實し、この協定を事實上廢棄せしめるに至つたのである。元來英本國が濠洲労働者の利己主義を利用して成立せしめた白濠政策が、今やその相貌を變じて英本國排除となつて現はれることは、まことに皮肉な現象であつた。

この様な白濠主義の變貌は、本國依存の爲に取られた歴史的所産であるこの政策のもつ矛盾が、その歴史的變

遷の内に、この土地のもつ地理的性格を反映する事によつて露呈せられた事を示すものである。その故に、かゝる矛盾の内にこそ、新しき濠洲の明日の秩序が芽ぐみつつあるはづであつた。而も濠洲人がその生活の原理として白濠主義を採用してアジアを拒否する以上、かゝる傾向は尙、濠洲をして孤立的な濠洲人の濠洲なる閉鎖的社會へと移行せしむる外になき事は既述せる通りである、

然し乍ら、この様な傾向も、ワシントン會議の集團保障體制の崩壞、日本の強力なる海軍の出現、或はエチオピア戰爭における英國地中海々軍への不安等は、再び彼等の國防不安を深刻ならしめ、自らを太平洋の強國として意識し得べくもない濠洲をして對英依存への急角度の轉廻をなさしめたのである。濠洲人の濠洲を標榜し、最も本國分離の傾向の強い労働黨内閣の崩壞や、經濟的にオツタワ會議への参加等も亦、この様な國防的見地からも了解されなければならない。

而してこの様な動搖は、濠洲の負つた二重の性格、即ちアジア太平洋的國家としての地理的性格と、これに背

馳するアングロ・サクソンの前哨として白濠主義的性格との、この兩者の中に苦惱する濠洲の姿であるとも云ひ得る。メンジースの所謂太平洋諸國家への善隣政策も、その前者の一表現であるが、彼等が白濠主義を固執する限り、それは單なる口頭の禪に終るものである。そしてこの様な地理的性格への背馳を敢て強行しようとする爲には、その地理的規定を克服し、彼等のいはゆるアジアの脅威を充分壓倒するに足る強大な海軍力が必要である。換言すれば、英國の海軍力がかゝる濠洲の背理的行動を補填し得るものでなければならぬ。

而も現實には、落日の英海軍の保障に絶対の信頼を置き得ない濠洲は、彼等の同種民族であり、アジア的太平洋に對する新しい挑戰者として登場して來た米國に對する依存へと移行するのである。英本國分離の傾向の最も強い労働黨が、白濠主義を固執するの故に最も對米依存を強調する急先鋒たることもこの様にして理會し得るのである。こゝに亦白濠主義の第二の變質を見出し得るのである。

而も米國は元來英國と一體のものであつた。故に濠洲が白濠主義を放棄せざる限り、依然として南太平洋に於けるアングロ・サクソンの前哨としての自己の不安定なる姿を見出さねばならないのである。

四

白濠主義のもつ矛盾は、その地理的性格を反映して濠洲の情勢を屢々動搖せしめた。然し、この地の占有者がアングロサクソンである限り、彼等の地理的自覺を期待することは不可能であらう。白濠主義とは今やその正否にかゝらず彼らの生活の原理なのであり、その拋棄は直ちに彼等の大陸からの退場を命ずるものだからである。然らばこの背理的政策の廢棄は、そのもつ英領なる文字の抹殺される時でなければならぬ。その故に今や濠洲は皇軍の鐵槌を受けつゝあり、かくてこの政策の採否はもはや濠洲の意志ではなく、その破棄は日本の、アジアの意志なのである。それはやがて白濠政策を實力によつて保障せんとする米英の徹底的破砕を意味す

るものでなければならぬ。そしてこの事は、既に現實として我々の眼前に展開せんとしつつある。

かくて、アジアに復歸する濠洲の姿は如何にあるべきか。もとより白濠主義の廢棄によるアジア移民の移住が何よりも先づ問題とせらるべきであらう。濠洲の正常な開發と發展とは、それなくしては望みがたいからである。しかし、このアジア移民を熱帯濠洲に限らうとするが如き所説は全く理由なきところであり、現在の事態を認識せざるものとして殆んど了解に苦しむのである。

勿論濠洲の經營が徒らにアングロ・サクソンの遺産の繼承であつてはならない。各般の方策は吾々の自主性のうちに決定されるべきである。この意味に於ける濠洲の研究が要望される所以もここに在る。例へば白濠主義が云爲される時、常に問題とされる濠洲の人口收容力の如きも、たゞ彼等の利己的な生活程度の維持を前提として考慮されたものであつた。吾々はかゝる前提を離れて、眞に濠洲がその潜在する力を發揮するに足る人口數を考究しなければならぬ。

然し乍ら、かゝるアジア的濠洲の實現は、吾々がさきに濠洲の閉鎖社會への移行を否定した様に、この大陸をアジアの内に閉鎖する事であつてはならない。即ち濠洲がその地理的必然に従つてアジアに復歸するといふことは、同時にそれによつて、それ自らの世界性を獲得することを意味するものでなければならぬのである。新しき濠洲經營の基本的觀點は、正にここに置かるべきであらう。

註

- ① この點については、大東亞地政學新論所載の「濠洲の地政學」に若干ふれて置いた。
- ② 小牧實繁、日本地政學、八九頁
- ③ A. W. Jose: History of Australasia (ed. 1914) に詳し
5。
- ④ Cheney: Industrial and Social History of England (1923) p. 180.
- ⑤ W.S. Jevons: The Cool Question (3ed. 1906, p. 411)
- ⑥ A. W. Jose: ibid. p. 212.
- ⑦ Official Year Book of the Commonwealth of Australia (1936 No. 26) § Agricultural Production の項參照。

- ⑨ A. W. Jose: *ibid.* p. 233.
- ⑩ J. W. Gregory: *Australasia* Vol. I, p. 21.
- ⑪ Zischka Anton: *Die Baumwolle* (邦譯、高山洋吉五八頁)
- ⑫ O. Y. B. of Australia (*ibid.*) p. 698. 一八七〇年一四〇〇
 一四一〇年一四二〇年一四三〇年一四四〇年一四五〇年一四六〇年一四七〇年一四八〇年一四九〇年一五〇〇年一五一〇年一五二〇年一五三〇年一五四〇年一五五〇年一五六〇年一五七〇年一五八〇年一五九〇年一六〇〇年一六一〇年一六二〇年一六三〇年一六四〇年一六五〇年一六六〇年一六七〇年一六八〇年一六九〇年一七〇〇年一七一〇年一七二〇年一七三〇年一七四〇年一七五〇年一七六〇年一七七〇年一七八〇年一七九〇年一八〇〇年一八一〇年一八二〇年一八三〇年一八四〇年一八五〇年一八六〇年一八七〇年一八八〇年一八九〇年一九〇〇年一九一〇年一九二〇年一九三〇年一九四〇年一九五〇年一九六〇年一九七〇年一九八〇年一九九〇年二〇〇〇年
- ⑬ A. W. Jose: *ibid.* に詳し。
- ⑭ 支那人排斥の立法の歴史は M. Willard: *The History of the White Australian Policy* に詳し。
- ⑮ M. Willard: *ibid.* p. 103.
- ⑯ H. L. Harris: *Australia's National Interest and National Policy* (1938) (邦譯、徳増榮太郎七六頁)
- ⑰ ホリス、前掲書、一三一頁。
- ⑱ 角田順、太平洋に於ける英帝國の衰亡、九四頁。